

嵐牛 友の会便り

第十五号

2018.10.27発行

〒436-0004

掛川市八坂434-1

嵐牛俳諧資料館

伊藤鋼一郎

携帯番号

090-1472-2972

Eメールアドレス

takumise@

titan.ocn.ne.jp

嵐牛遺産で一番大事にしたい寄せ書き帖『錦木』

伊藤鋼一郎

母親が昔から気を使い、自分なりに読み下し整理をしていた寄せ書き帖が我が家に残されています。嵐牛が俳諧で長い間活躍した証であり、我が資料館でも最も大事にしながらない資料です。この度の友の会では講話・講読とともに、その現物も見ていただく予定なので、その概略をご案内いたします。

掛川藩のお抱え絵師の村松以弘の絵で、「俳諧の祖 芭蕉翁の座像」が巻頭を飾っています。次には、加賀金沢生まれ、当時、京俳壇の中心人物だった成田蒼虬そうきゅうが、「この寄せ書き帖の命名についての文章を書いています。「竹里が此の帳を錦木となづくるは、秋の梢の錦にもあらず。又柳桜のはるの錦にもあらず。こは我思ふ人の門にたて、風交を結ぶなかつら媒なかつらのにしき木なりとは、しほらしき名にぞありける」と絶賛しています。同門の竹里が最初思い立ち、始めた寄せ書きだったようです。次は嵐牛の先生である卓池の俳文、発句、南画……と続きます。

東海道筋である当家には大勢の文人・墨客が立ち寄り、かなり賑わったことが想像されます。特に俳諧の心得がある者は何泊もして歌仙を巻いたようです。卓池門の俳友はもちろんで、卓池門四天王の一人である塞馬は、二週間もの長い間滞在し、記念の文章と連句をのこしています。法多山尊永寺の思玄上人や、日坂の成瀬大域等も見受けられます。表紙、裏表紙は共に桐の薄い板に、表紙は春の桜、裏表紙は秋の錦木（楓科の落葉樹）の紅葉が描き込まれ、村松以弘の筆かと思いますが、いかがでしょうか。

（嵐牛友の会・会長）



『錦木』 満開の桜が描かれた表紙(右)と、
紅葉する錦木が描かれた裏表紙(左)

目次

- [1]嵐牛遺産で一番大切にしたい寄せ書き帖『錦木』
伊藤鋼一郎
- [2]柿園友垣抄(12)
—鳴滝の里格と柿園評月並—
加藤定彦
- [3]柿園友垣抄(13)
—清民の嵐牛詠藻評—
加藤定彦
- [4]『柿園嵐牛俳諧資料集』ご案内
- [5]講読・鑑賞の会
今後の予定
- [6]柿園近影

柿園友垣抄(十二)——鳴滝の里格と柿園評月並——

加藤 定彦

嵐牛の俳諧活動の基盤は、なんといつても「柿園評月並」であろう。『柿園嵐牛俳諧資料集』の刊行までに披見出来た同月並の合本は、

① 岡崎(袋井市) 住貫一・椿谷旧蔵、鈴木健治氏現蔵

② 福田(磐田市) 住晴笠旧蔵、大竹裕一氏現蔵

③ 下青島(藤枝市) 住飯塚延松旧蔵、故田中明氏蔵

④ 新貝(磐田市) 住如障旧蔵、故田中明氏蔵
など、月並の常連が手元に保管し所持していたもの。

この四月、寺田良毅氏の講演を拝聴した折、ご所蔵の「柿園評月並」合本の披見をお願いし、貸出中の佐藤清隆氏から複写を送って頂いた。両氏に深甚の謝意を表しつつ、以下にその概略を紹介し、若干のコメントを付したい。

当該合本は、天地をやや裁った半紙本で、表紙に「万延二百年^句柿園評月並/遠州山名郡浅羽庄/長溝村/芦洲」、後表紙に「ナガミゾ/芦洲/桑原治兵衛」と墨書、長溝(袋井市)の芦洲旧蔵本と判明する。内容は、

1. 柿園評月並正月/未十二月 催主四山/杜逸/山竹

柱刻「申正月 一(〜二) 二丁

巻軸 立はるの何より早し人のうへ 嵐牛

「二」裏ノド「去未冬出題仕候四季句合句数少く候二付未延引相成居候」と口上あり。

2. 柿園評月並如月分 催主四山/山竹/杜逸

柱刻「申二月 三、二月 四」 二丁

巻軸 き、あくや花まつ人の日和占 柿園

3. 柿園評月並五句合/三月分 催主四山/山竹/杜逸

柱刻「三月 五(〜六) 二丁

巻軸 春の野や一里むかふの人もつれ 柿園

4. 柿園評閏三月分 催主山竹/四山/杜逸

柱刻「申閏三月 七(〜八) 二丁

巻軸 ちる花や茶の間にすわる人もなし 嵐牛

5. 柿園評月並卯月分 催主四山/山竹/杜逸

柱刻「申四月 十(〜十一) 二丁

巻軸 輪蔵や女の声のわかばもる 柿園

6. 柿園評月並六月分 催主山竹/杜逸/四山

柱刻「庚申六月 十三(〜十四) 二丁

巻軸 今朝ははやちりに掃かれて火とりむし 嵐牛

7. 藤輪居士初盆会奉灯句合 企画欣露/為政/素涼

早苗庵知碩評・晴岡居貫一評 柱刻なし 半丁

巻軸 みそはぎや余所の袂もしめり勝 知碩

晴岡居貫一評 半丁

8. 蓮の寒の飛日は定めなかりけり 貫一

福田観音開帳中奉灯 企福田此君園裡社中

柿園嵐牛先生評 半丁

巻軸 ひや〜と稲妻うける湯肌かな 嵐牛

開帳中奉灯 柱刻「安政六年未秋発起」

此君園晴笠評 半丁

9. 柿園評月並十一月分 催主不記 晴笠

柱刻「未十一月 廿七(〜廿八) 二丁

巻軸 臥竹になほふる雪や日ぐれ方 嵐牛

起出るや火も出来ゆきも降きたに

の十六丁で、欠丁の「九」は「四季句合」、「十二」は「五月分」、「十五(〜廿六)」の六ヶ月分は投句しなかつたための欠丁か。8は②にも含まれる。芦洲の句は、1

・2・9の三ヶ月分に、

出ふねまつひぎを並て寒哉 長ミソ芦洲

など三句が収められる。欠丁が惜しまれるが、「柿園評月並」伝本の空白を埋め、貴重である。「未」は安政六年、「庚申」は安政七年(万延元年)。7と8も四天王の内三名が評者で、それぞれ地元で指導的役割を果たしていることが判明、それと同時に「柿園評月並」にも、

1. ぶぐ、はぬ誓ひもをかし叔母の前 中ノちせき

2. 庵の留主とへばうぐひすだまりけり 貫一

などの句を投じ、嵐牛の指導下、精進を怠っていない。

他に注目すべきは鳴滝(掛川市成滝)の里格で、1では「地十四点」、6では「天十六点」の好成績を挙げている。調べてみると、里格は天保初期から相良の蘭英(少風)

や金谷の曙山らとともに江戸の雪門に属し、月並句合や旦暮帖(歳旦・春興帖)の常連となっていたが、雪中庵六世の椎陰が長期に亘って西国を行脚、金銭上のトラブルを惹起したため、嘉永頃には雪門を離れ(岩崎鐵志「遠江の雪中庵社中(3)」『遠江』15号参照)、やがて曙山や少風が鬼籍に入ると、もっぱら「柿園評月並」を發表

の場とする。入門したり、柿園門の年次集『そのま』に参加する親昵さはなかったが、嵐牛の懇篤・的確な選評を信頼したのであろう。当該本の「揮毫之部」(六点)には、

1. すゝの竹くれて受あふ日和哉 里かく

5. 山みちやふいとすゞしきまがり角 //

などが採られている。

(嵐牛友の会・顧問)

柿園友垣抄(十三)——清民の嵐牛詠藻評——

加藤 定彦

『柿園嵐牛俳諧資料集』を刊行出来たが、「書簡の部」に収録し得た受信書簡は他所に遺存する四通に終わった。発信書簡の三十通に比べ、いかにも淋しい収録数である。

ところが、最近になって伊藤館長から嵐牛宛の書簡類が出て来たとの連絡が入った。倉島利仁が早速撮影に駆け付け、写真データを送って呉れた。その内、俳諧関係十七通を翻刻し、解題と略注を付し、『東海近世』26号に投稿した。幸い、資料集の補遺として掲載して頂くことになった。十七通の中には資料集に収められる作品や作者と関連するものが何通か含まれ、大いに参考となる。資料集を閲読される際には是非併読頂きたい。

なお、翻刻ではスペースがなかったたので、以下に紙幅を割き、「六、清民筆嵐牛詠藻評」の主要部を紹介しつつ、当時の嵐牛評価がいかに高かったかを伝えたい。

因みに評者の清民は須賀川の人。女流俳人として全国俳壇に名を馳せた市川多代女の先輩格で、俗名は山辺頼之。別号、観山居。慶応三年十二月九日没。享年七十五。

清民評では詠藻の引用はすべて略記されていて、調べてみると、多くは嵐牛著『句集草稿二編』に見え、完全な句形を括弧内に太字で記した。年次が判るものはすべて文久元年(1861)のもので、詠藻を清民に送ったのもその頃であろう——以下、引用の句頭には「○」を付し、加藤が解説している部分には「▽」を付した——

▽まず前置きとして次のように述べる。

玉の思藻凡上の塵を払、見る度精神爽二気朗也。一章も凡なるはなし。そが中二あやしきまでたへなるもの、不才、筆の立途をしらず。只、心裏これをよみて引かたに甲乙を以てす。

▽皆素晴らしい句で、不才の身としては誉めるのみだが、親交上、黙っている訳にも行かず、敢えて好みの点から品評させてもらおうと最初に断り、以下、評を読み進めると、こうした評言が在り来たりの社交辞令ではないことが諒解される。

○影移る二階の人(かげうつる二階の人やかきつばた)

燕子花の麗艶なる、動もすれバ美し過るに陥る。古哲も舌を捲べし。

花やかに閑に寂て、姿情残る処なく、実地の実を盡し、あつさりさら〜として、まことにあやしきまで妙なる作といふべし。優美にて仇ならず、至れり尽

せり。

▽手放しの絶賛だが、美女の形容に「いずれ菖蒲か燕子花」の語があるように、「燕子花」から「二階の人」を妙齡の美女とイメージさせ、しかもストレートには描かず「影」としたのが絶妙。「花やかに閑に寂て」と評する所以である。嵐牛作品には珍しい艶治な作。

○今朝もまた夏の月(今朝もまた水にあるなり夏の月)

▽自信作らしく、連句の立句に何度か用いている。初五の「また」は清濁に迷うところだが、「夏の月」の本意・本情は清涼感と短夜にあり、清んで読むのがよい。

○朝雨や蚊ふすべ(朝雨や蚊ふすべくさき漁まち)

▽「蚊ふすべ」は「蚊遣り」、「漁まち」は「漁師町」。「朝雨」が効果的。実景・実感を五官で見事に捉えた作。

○落着た並ぶ露(落着たさまのをかしや並ぶつゆ)

沙鷗が先二場を取たさま也。並ぶ露といふ句二一層佳を加ふ。はし書有ものハ、誠(に)神ごもる所ある歟。鷗が句ハ滑稽より姿情を生ず。君が句ハ実事より

比喩して産出す。

○草の戸や一本あるも(くきの戸や一本あるも遅ざくら)

といふは、遅といふ字二句(韻)の付事も妙也。

右の句々彬々たるもの(文・質ともに備わり)、作二斧斤(推敲)の痕なし。

○蚕の香の五月雨(蚕の香のぬけぬひと間や五月雨)

○もの喰た鹿の子(物くうた口に袖ひくかのこ哉)

○初荷から老馬(初荷から尻た、かる、老馬かな)

此余、四十余章ハ世人の及所ニハ無レ之、一々見所ハあれど、君が句ニしてハ砂石なるべし。されど、愚が眼の届かぬ所ハ論の外也。愚意如レ斯。(下略)

清民

当時の俳人番付では二人はほぼ拮抗し、年齢は清民が五歳上。一派の指導者でありながら、嵐牛は五、六十句にも及ぶ詠藻を送って批評を仰いだ。その心意を汲み、清民も等閑の褒辞でお茶を濁さず、懇篤に選評し、尾張の先人沙鷗が「滑稽より姿情を生ずる」作者だとすれば、嵐牛は「実事より比喩して産み出す」作者だと評する——清民の真率な批評精神は、下総香取の旭斎宛書簡にも「思ふ所一点もかくさず加朱致候也」と表明されている(矢羽勝幸「近世俳人書簡集」235『くらげ』平成15・12)。

こうした親密な文通もやがて終止符が打たれ、慶応四年正月四日、江戸の思楽から清民の訃報が届く。嵐牛は「此人旧知己、近き頃わきて親しき文音有しを、あ、あはれ〜」と日記に慨嘆している(『資料集』308ページ)。(嵐牛友の会・顧問)

『柿園嵐牛俳諧資料集』ご案内

購入希望の方は、嵐牛友の会会長
伊藤鋼一郎までご連絡ください。
頒布価格は一部五〇〇〇円です。



講読・鑑賞の会 今後の予定

第十八回 十一月十八日(日)

会場 嵐牛俳諧資料館和室 八畳十六畳
時間 午後一時三十分～四時三十分
内容 寄せ書き帖『錦木』鑑賞
加藤定彦先生講話「三子三筆詩箋の里帰り」
石川依平「宇津の山越」講読 ほか

第十九回 五月十九日(日)

会場 嵐牛俳諧資料館和室 八畳十六畳
時間 午後一時三十分～四時三十分
内容 石川依平「宇津の山越」講読
嵐牛連句講読 ほか

※ 友の会に対するご要望などをお聞かせください
また、友の会会員の方、その他嵐牛繋がりで面白いこと
がありましたらご投稿ください。



彩り 鮮やか

ヒタキの声 千両の色づき 今年は冬の訪れが早そうです

平成三〇年十月二四日 撮影 事務局 伊藤英子